施工者に幸あれ 第123回

建築の「形」をつくる

構造家・三原悠子

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco

■影響は本から

構造家として事務所を営む三原悠子さんは1983年生まれ。幼い頃から美術好きではあったが，漠然とした進路しか頭に浮かんでいなかったという。転勤族の家庭に育ち，茨城県立水戸第一高等学校を卒業した。覇志堂が「建築家の妹島和世さんや構造家の金箱温春さんと同窓ですね」という。水戸芸術館のショップで手に取った建築雑誌から東京理科大学の小嶋一浩研究室を知り，理工学部を受けることにしたとか。小嶋一浩さんは，つくる建築が優れていたばかりか，ファッションにも独特のセンスをもっていたし，「建築家であるから先生と呼ばないで」といったのも，入学したばかりの学生には憧れの人だった。「あなたの部屋を空間化せよ」の課題で小嶋賞を受けた三原さんは，小嶋さんのインパクトのある言葉の数々を今も忘れない。当然，建築家を目指していたのだが『小住宅の構造』（池田昌弘著，エーディーエー・エディタ・トーキョー，2003年）を読んで構造家に興味を覚える。さまざまなトップ建築家と協働する仕事に魅力を感じたのだった。卒論のゼミでは構造家の新谷眞人さんから，建築の形が力学と幾何学から生まれることを学ぶ。さらに，本格的に構造を学びたいと大学院に進み，実務経験豊富な北村春幸教授の研究室で，大規模建物の構造設計の手法や解析を勉強したのでした。

■佐藤淳さんを身近かに

構造家の佐藤淳さんには小嶋研究室のレクチャーに来たときに出会った。山本理顕さんとのインタビュー記事を読んで，若手の構造設計者として印象に残っていた人なのだった。佐藤さんの話は難しかったのだが，佐藤淳構造設計事務所でアルバイトをすることに。そして，そのまま所員として修行することにしたのは佐藤さんへのリスペクトからだ。建築家との打合せの際，その場で手計算で構造を提案するというやり方は，木村俊彦構造設計事務所の伝統でもあり，佐藤淳構造設計事務所も受け継いでいるようだ。佐藤淳構造設計事務所では帰りが遅くなることも多々あったが，佐藤さんや先輩たちと夕食をともにしながら聞く構造論は終電を忘れるほど魅力的だったし，「全然苦にならなかった」といいます。建築家は独立すべき，という小嶋さんの言葉も心に残っていて，独立志向はあった。所員として10年勤務した後，スターバックスコーヒー太宰府天満宮表参道店（設計：隈研吾建築都市設計事務所）の担当をきっかけに独立したのでした。

■Graph Studioとして

いったん三原悠子構造設計事務所として独立したのち，現在は，仲間と活動している。関西学院大学准教授をしながら関西で独立している荒木美香さん，東京大学で研究活動をしている福島佳浩さんの二人だ。チームで動くメリットを活かしたいと付けた事務所の名前は「Graph Studio」。相談し合うこともできるし，構造の研究と構造設計は切り離されていないという想いを佐藤淳構造設計事務所から受けついだ三人には有効だ。覇志堂も，佐藤淳さんが若い構造家を育てる側の人として着実に裾野を広げていると実感する。

現在は，江尻憲泰日本女子大学家政学部住居学科教授との縁で，講師として教鞭を取るようになった。また，実務面でもプロポーザルで勝ち取った，鋸南町都市交流施設（設計：遠藤克彦建築研究所・アトリエコ設計共同体）が設計中で，忙しい日々を過ごしている。

計算結果の数値と，自身の身体感覚の相違を感じとる感覚を磨きたいと研鑽中。バックボーンを有効に活かして，強い構造家になることを三原悠子さんには期待しているのです。